

聖書箇所:ルカの福音書 4章 16~30節

説教題:主はわたしを遣わされた

1 安息日の会堂で

(1) イザヤのことばが実現した

ルカの福音書は、他の福音書に比べると聖霊なる方についても詳しく触れられている、そのような特徴があると言われています。

イエスは洗礼者ヨハネから水でバプテスマを受けられた時のことです。水から上がり、祈っておられると天が開け、聖霊が鳩のような形をして、この方の上に下られたと書かれていました。

その後、イエスが荒野に向かわれ、悪魔から三つの誘惑を受けられたときも、イエスは聖霊に満ちておられとわざわざ書かれています。また14節にも「イエスは御霊の力を帯びてガリラヤに帰られた」ともあります。どうして繰り返し聖霊のことを強調するのでしょうか。その理由は、今日の箇所を見ていくとき、次第に明らかになります。

安息日に会堂に入られたイエスは、今で言えば旧約聖書を朗読しようとして、人々の前に立たれました。そのとき、イエスの手に渡されたのはイザヤ書で、イエスはこのように書かれている所を開き、読み上げます。18節。「わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕らわれ人には赦免を、盲人には、目の開かれることを告げるために。しいたげられている人々を自由にし、主の恵みの年を告げ知らせるために。」

イエスは、イザヤ書61章の1節と2節前

半を開きました。このみことばを読み上げた後に、イエスはこう言われます。「きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおりに実現しました。」

(2) 主はわたしを遣わされた

イエスのことばを聞いて人々がどんな反応を示したのかについては、また後ほど見ます。その事に触れる前に、まず「主はわたしを遣わされた。」このことばに目を留めておきたいと思います。ここで「主」とは父なる神のこと、「わたし」とは会堂の中で人々の前に座っておられるイエス・キリスト。父なる神は、御子イエス・キリストをこの罪の世に遣わされた。内容としては、非常に単純です。しかし意味はそれほど単純ではありません。

というのは、新興宗教の教祖だと名乗る方が、「わたしは神から遣わされた」と言って、人々をだまして金を巻き上げたりする事件が起きたりするからです。イエスもそんなひとりではないのか。そんな疑問が湧いてきて、普通の人なら警戒してしまいます。もし、なんの根拠もなくイエスひとりが、自分で自分のことをこんなふうに使っていたのなら、疑うのは当然です。しかしイエスはそのような方ではないはずです。必ず何か確かな根拠があつて、このように言われているはずです。では、イエスは何を根拠にして、自分は主から遣わされたと言うのでしょうか。よく読むとイエスはきちんと根拠を示して、語っている

ことがわかります。

(3) 御霊がおられる

それは18節の最初のところです。「わたしの上に主の御霊がおられる。」先ほど、ルカの福音書ではどうして御霊のことが何度も強調されているのか不思議だと言いました。きちんとした理由がありました。主の上に御霊がおられる。でも、御霊は目に見えない。見えないものを取りあげて、そこにいると言っても信用できない。そんな反論もありえます。その点もぬかりありません。イエスが氷から上がり、祈っておられた時、御霊なる方が、天から鳩のような形をして下ってこられ、イエスの上にとどまりました。周りにいた人たちはそれを目で見ただけです。

「わたしの上に主の御霊がおられる。それが、主はわたしを遣わされたということの証拠です。」この方は神でありますから、本来ならなんにも証拠とか理由とかそのようなものを示す必要はありません。けれどもこの方はどこまでも謙遜なのです。ご自分が遣わされてきたことを、控えめに表現されます。

2 郷里では歓迎されない

これに対して、人々はどのように反応していったのか。次にその事を見ていきます。「みなイエスをほめ、その口から出て来る恵みのことばに驚いた」とあります。確かに驚いてはいますが、はたして正しく意味を理解したのかというと、どうもそうではない。というのは、すぐ後にこう書かれているからです。

「この人は、ヨセフの子ではないか。」

イエスは今ご自分の故郷であるナザレにおられます。ここにいる人たちはみな、イエスのことを小さな時から知っています。つい

先日まで、イエスは大工として人々といいしょに働いていました。そのイエスがある日、町からいなくなり、どうしたのかと思っていたら、イエスの噂が隣の町から聞こえてきました。イエスは悪霊を追い出し、病に苦しむ者をいやしているらしい。そればかりではない。その口からは、力強い神のみことばが語られている。

町の人にしてみれば、今まで知っているイエスと、噂で聞こえてくるイエスとまったくかけ離れていて、同じ人物とは思われない。いったいどうしたのか。噂は本当だろうか。好奇心と猜疑心がない交ぜになったような状態です。そんなとき、イエスが故郷に戻ってきました。当然、町の人たちの目はイエスに注がれます。自分の目で確かめてやろうという表情で、イエスを食い入るように見つめています。

もちろんイエスは、人々が好意的に自分を迎えているのではなく、疑いの目で見ていることを知っておられます。そんなとき、私たちならどうするでしょうか。人々の疑いを晴らすために、一生懸命努力する。それが普通でしょう。ところが、イエスがこの後とられた態度を見ると、驚いてしまいます。私たちの予想とは正反対の行動を取られます。

イエスは24節で、「まことに、あなたがたに告げます。預言者はだれでも、自分の郷里では歓迎されません。」と語ってから、旧約聖書に出て来る、二つの例を取りあげます。一つは預言者エリヤのことです。第一列王記17章にこのあたりのことが詳しく述べられています。イスラエルに大飢饉が起こったとき、神は預言者エリヤをひとりのやもめのところに遣わしました。他にもたくさんはやもめがいたのですが、遣わされたのはただひと

りのところ。

二つ目の例として取りあげているのは、ナアマン將軍のことです。このあたりのことは、第二列王記5章にあります。彼は、当時の王の側近として仕えていて高い地位にありながら、重い皮膚病に冒されてしまい、苦しんでいました。神はそのナアマンのところに預言者エリシャを遣わされます。当時、ツアラアトと呼ばれる病気にかかった人たちは他にもたくさんいたのですが、遣わされたのはただひとりのところ。

イエスは何を言いたくて、わざわざ二つの例を挙げたのか。こういうことです。「あなたがたは、わたしにこう言うでしょう。私たちはこの目で奇蹟を見てみたい。だから、他の町でもやったように、この町でも同じように奇蹟を起こせ。でも、わたしは自分の郷里には遣わされていません。ですから、ここでは何もしません。」

火に油を注ぐというのはこのことです。イエスは、もう少しおだやかに言うこともできたのに、どうして人を怒らせるような言い方をなさるのだろうか。これでは、みんなが怒るのは当たり前。イエスが取られた態度に、私たちは戸惑ってしまいます。

もちろんそこには、深い理由があつてのことのはずです。それは何であつたのか。その事を最後に考えます。

3 世（故郷）から追い出されるイエス

ヒントはイエスが読み上げたイザヤ書の中にあります。もう一度、18、19節を読みます。「わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕らわれ人には赦免を、盲人

には目の開かれることを告げるために。しいたげられている人々を自由にし、主の恵みを告げ知らせるために。」

イエス・キリストが遣わされてきた目的は、なんであつたのか。この方は何をしましたか。確かに、目の見えない人の目にイエスは手を触れられ、目が開かれました。長年苦しんでいた病がいやされ、そこで多くの奇蹟が起きました。私たちの興味は、この方が起こされた奇蹟にだけ集中します。ナザレの人々も同じです。奇蹟を見られるかどうか、それがこの日の人々の関心でした。

でも、この方が私たちに最も伝えたかつたのは、何であつたのか。神は、罪人を赦そうとしておられる。この地上で「わたしは貧しい者だ」と嘆いている者にこそ、主の恵みは注がれているのだ、そのことを伝えたいのです。それは口先だけではありません。どれくらい神が、罪人である私たちを愛し、救いだし、恵みを施そうとされているのか、実際に目に見える形で私たちに示そうとされるのです。どのようにしてですか。この方が罪人となられて、十字架に挙げられ、そこで死んでくださる。そして三日の後によみがえられる。神は罪をおさばきになる方であると同時に、罪人を愛し、死から救い出すお方であることを、御子イエス・キリストのお姿を通して、私たちに教えてくださろうとしている。

十字架はいったいどんな場所でしょうか。この世の成功者がいく所ですか。とんでもない。その反対です。この世から追い出された者が行く所。この世から、おまえは生きる資格はないと宣告された者が最後に行かされる所です。イエスが向かわれたのはその十字架でした。

ヨハネの福音書1章10、11節にこうあり

ます。「この方はもとからこの世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。この方はご自分のくにに来られるのに、ご自分の民は受け入れなかった。」

イエスが「預言者はだれでも、自分の郷里では歓迎されません」と言われた意味がおわかりでしょうか。ご自分の故郷ナザレのことを指してはいますが、でもそれだけではない。この方の郷里であるこの世からこの方は追い出されていくのです。

最後に疑問が残ります。イエスは、不信仰なナザレの人たちのことを見捨てたのだろうか。

そんなはずはありません。ナザレの人たちはイエスにとって特別な人たちです。小さな時からお世話になり、互いに冗談を言い合い、一緒に笑い、涙を流した、そんな人たちです。そんな人たちの救いのことを願わなかったはずはありません。それなのに今日の箇所では、イエスはナザレの人々にイエスを見捨てるように仕向けているようにさえ見えるのです。ここではどういふわけなのでしょう。

はっきりとわかるわけではありません。でも、イエスはナザレの人たちから見捨てられる道をわざわざ進んでおられるように感じるので、故郷の人たちからも見捨てられて、そこから十字架の道に歩いていくのです。

ナザレの人たちがイエスを追い出すのを見て、何と不信仰な人たちと嘆きますか。ナザレの人たちの姿、これは私たちではありませんか。私たちは彼らと同じように、遣わされてこられた方をこの世から追い出し、見捨て、十字架につけてしまったのです。私たちはそんなふうにして、神を十字架で殺してしまいました。

神は私たちを見捨てたのでしょうか。神がお見捨てになったのは、神のひとり子イエス・キリストでした。私たちは見捨てられていない。こんなひどいことをしてしまった私たちのことさえも覚えてくださり、神は私たちのところに救い主を遣わしてくださいました。神を見捨てた者をさえ、神は救おうとされているのです。

主のあわれみを覚え、御名をあがめます。